

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	山 口 美 穂
2. 審査委員	主 査：(岐阜大学教授) 吉 澤 寛 之 副主査：(上越教育大学教授) 水 落 芳 明 委 員：(岐阜大学教授) 平 澤 紀 子 委 員：(岐阜大学教授) 柳 沼 良 太 委 員：(上越教育大学教授) 大 島 崇 行
3. 論文題目	小学校外国語科「話すこと〔やり取り〕」領域におけるSmall Talkの指導方法の開発—児童の発話・英語学習に対する情意と非認知能力に焦点化した検討—
4. 審査結果の要旨	先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座山口美穂から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和7年1月23日（木） 9時40分～10時20分 場 所：オンライン会議システムによる実施 1. 学位論文の構成と概要 第1章 小学校英語教育の変遷とSmall Talk 第1節 本論文の意義 第2節 小学校外国語科導入の経過 第3節 「話すこと〔やり取り〕」における言語活動Small Talk 第4節 コミュニケーション能力の定義 第5節 本論文で扱う非認知能力 第6節 本論文に関わる先行研究概観 第7節 本論文の目的 第8節 本論文の構成 第2章 Small Talkの実施による小学校1学年～中学1学年の発話パフォーマンスの変化 第1節 本章の問題と目的 第2節 研究方法 第3節 結果 第4節 考察 第5節 今後の課題 第3章 Small Talkを実践した児童の発話パフォーマンスの変化と英語学習に対する情意の関係 第1節 本章の問題と目的 第2節 研究方法 第3節 結果 第4節 考察 第5節 今後の課題

第4章	Small Talkにおける児童の発話パフォーマンスの変化に英語学習に対する情意が及ぼす影響
第1節	本章の問題と目的
第2節	研究方法
第3節	結果
第4節	考察
第5節	今後の課題
第5章	Small Talkにおける発話と英語学習に対する情意及び非認知能力との関係
第1節	本章の問題と目的
第2節	研究方法
第3節	結果
第4節	考察
第5節	結論
第6章	新しいSmall Talk指導法の提案
第1節	研究の目的と構成
第2節	Small Talk時における発話状況のメタ認知の効果
第3節	介入によるSmall Talk時の発話と情意の変化
第4節	Small Talkの話題を児童自身で決定する活動の提案
第5節	今後の課題
第7章	総括的討論
第1節	小学校外国語科Small Talkにおけるコミュニケーション能力と非認知能力の関係に関する知見のまとめ
第2節	Small Talkの新しい指導法の提案
第3節	今後の展望

本論文は、小学校外国語科・外国語活動「話すこと [やり取り]」領域におけるSmall Talkを外国語活動・外国語科の授業で実施し、Small Talkによる児童のコミュニケーション能力の変容を、児童の発話内容を分析することで明らかにすること及び、英語学習に対する情意がSmall Talkにおける児童のコミュニケーション能力の変容に与える影響を明らかにする。その結果に基づき、効果的なSmall Talkの指導モデル及び教師の介入方法を提案することを目的とする。

第1章では、小学校に外国語教育が導入されてきた経緯を俯瞰し、小学校外国語でコミュニケーション能力の向上が求められていることを整理した。第2章から第5章では、言語活動の1つであるSmall Talkが、コミュニケーション能力の向上のために効果的であるという仮説に基づき、コミュニケーション時の児童の観察、発話の実態、アンケート調査による児童の意識調査、非認知能力に焦点を当てて検討した。第6章では、本研究で得られた知見に基づいたSmall Talkの指導法を提案し、第7章では全体をまとめた。

まず、Small Talkを実施することの意義を明らかにするために、Small Talkを経験した小学校1年生から中学1年生の児童・生徒の、ALTとの発話パフォーマンステストにおける発話内容を分析した。その結果Small Talkの言語活動を継続した児童のALTとの発話パフォーマンステストの発話量の増加が認められたこと、Small Talkを経験していない児童と比較して発話量が多かったことから、Small Talkによる会話の経験が発話量の増加に有効であると結論付けた。またFillerやResponseが使えるなど、会話を円滑に繋ぐスキルも習得されていくことが明らかになった。

次にSmall Talkの効果的な指導の検討のために、児童の発話と英語学習に対する情意面との相関関係を分析したところ、「緊張しないで話せる」という情意が「発話総語数」「3語以上の文の使用」の変化に関連することが分かった。児童の緊張する理由についての記述式回答から、正しく英語を話さなくてはならないという気持ちがあることや、発話の経験不足から緊張を感じる事が分かった。児童の情意面のアンケートは、「英語学習好感」「情報伝達意欲」「英語必要感」「文字学習重視」の4つの因子に分類された。それぞれの因子と児童の発話との相関を調べた結果から、「情報伝達意欲」と「会話中のポーズの割合」の間に相関関係があることが明らかになった。Small Talkでの話題を児童がより伝えたいという意欲がもてるものに工夫していくことの大切さが分かった。

次に、Small Talk時に児童がどのような会話をしているか明らかにするために、会話音声を経時的に分析した結果、Small Talkの継続により、会話の中で、「発話語数」「SVO/Cの文の数」「ターン数」「反応数」などの増加が認められた。このことからSmall Talkのような即興的な会話の経

験を続けることが、児童の自発的な発話量を増やしていくことや、会話の質の向上に効果があると考えられる。

児童のコミュニケーション時の緊張感に対する介入方法を開発するために、児童の対人関係の情意面とペアの組み合わせの関係を明らかにした。STAR (School-related Task Assessment & Resolution) の結果より得られた「友人関係の満足度」「周りの仲間の受容」と、アンケート結果より得られた「Small Talk時の緊張感」をもとに、階層的クラスタ分析を実施した。その結果、友人関係の満足度、周りの仲間の受容、Small Talk時の緊張感が標準化得点で0に近い「平均型」、仲間の受容が低い「仲間受容低型」、友人関係の満足度が非常に低い「友人関係満足低型」、Small Talk時の緊張感が高い「高緊張型」のグループに分けられた。その後、各グループの児童のペアリングによる、発話への影響を分析した。「平均型」の児童と「友人関係満足低型」の児童との組み合わせと、「仲間受容低型」の児童と「友人関係満足低型」の児童の組み合わせで、「発話総語数」「SV0/Cの文の数」「ターン数」の増加が、他の組み合わせと比較して顕著であった。これは「友人関係満足低型」の児童や「仲間受容低型」の児童は、Small Talkで友人と会話して英語で自分の情報を楽しく伝え合う中で、徐々に人間関係に対する肯定的な評価が高まるためではないかと考えられる。また「高緊張型」児童同士や「友人関係満足低型」の児童と「高緊張型」の児童の組み合わせでは、「ターン数」のみ増加していたことより、長く多くの英語表現を使用せず、会話の主導を早く相手に渡そうとする傾向があると推察される。

さらに、非認知能力と英語学習に対する情意が、Small Talk時の発話にどのような影響があるか分析した。発話を「発話総語数」「SV0/Cの文の数」「ターン数」で数値化し、非認知能力BIG5「外向性」「協調性」「開放性」「勤勉性」「神経症傾向」と、英語学習に対するアンケート結果から得られた3因子「英語学習好感」「仲間の受容」「コミュニケーション不安」との関連を分析した。その結果、「外向性」「協調性」「開放性」が高いことが、「英語学習好感」を高め、「発話総語数」を増やすことから、円滑なコミュニケーションのために重要であることが明らかになった。「コミュニケーション不安」と発話との関連は認められなかった。「コミュニケーション不安」は「外向性」「開放性」に負の関連があり、「神経症傾向」に正の関連があった。非認知能力は発話に直接影響を与えないが、英語学習に対する情意に影響を及ぼし、情意が発話に影響を与えるという間接効果があることが明らかになった。研究で得られた知見に基づいて、Small Talkの活動に、介入1「自己の会話をメタ認知した自己評価」、介入2「仲間からの肯定的評価」、介入3「個の特性を把握した意図的なペアリング」の、3つの実践を提案した。

今後の課題として、Small Talkの実践で変容が起こりにくかった「Small Talkに対する緊張感」「コミュニケーション不安」を感じる児童に対する効果的な介入を追及していく必要がある。ICTの活用により、自己のSmall Talkの活動についてメタ認知が可能になることから、これらの活用に学習意欲の向上効果が期待できる。本論文の限界に対応するため、今後はサンプル数を増やした検証や、長期間の実践による検証を実施する必要がある。

2. 審査経過

(1) 研究の目的と論文の整合性について

小学校外国語でコミュニケーション能力の向上が求められている現状において、小学校外国語科・外国語活動「話すこと [やり取り]」領域におけるSmall Talkの有効性が注目されている。本研究の目的は、Small Talkを外国語活動・外国語科の授業で実施し、Small Talkによる児童のコミュニケーション能力の変容を、児童の発話内容を分析することで明らかにすること及び、英語学習に対する情意がSmall Talkにおける児童のコミュニケーション能力の変容に与える影響を明らかにすることにより、効果的なSmall Talkの指導モデル及び教師の介入方法を提案することを目的とした。本研究で得られた知見により、Small Talkを実施した児童の発話パフォーマンステストにおける発話内容が明確にされ、発話の変化へ及ぼす影響と、その変化と児童の英語教育に対する意識の関係が明らかにされた。児童の学級の仲間に対する「受容感」「友達に対する満足感」「コミュニケーションに対する緊張感」の違いを配慮したペアリングによる、Small Talk時の発話への影響が明らかにされた。非認知能力と英語学習に対する情意が、Small Talk時の発話に与える影響を明らかにした。最後に、上記の知見をまとめて、これからの小学校外国語科「話すこと [やり取り]」領域の指導に活かせる新たな指導法を提案した。これにより、本研究の論文構成は研究目的に整合するものになっていると認められる。

(2) 研究遂行能力について

本学位論文は7章構成となっている。第2章から第5章は2020年から2024年にかけて小学校英語

教育学会 3 編と日本児童英語教育学会 1 編に採録された論文が基となっている。本学位論文の研究の中心が 4 編の査読付き論文で構成されていることから、研究遂行能力は十分備わっていると評価する。

(3) 論文の独創性や発展性、学校教育への関連

先行研究においては、Small Talk の実践事例が報告されているものの、児童のコミュニケーション能力の変容を、児童の発話内容を統計的に分析することで明らかにする研究は行われておらず、こうした分析を行うことで、Small Talk の効果を客観的エビデンスにより明確化したことは独創的である。さらに、子どもの非認知能力や英語教育に対する情意を中心とした意識、これらの特性に基づくペアリングが、Small Talk の発話に及ぼす影響を解明した新規性もある。学校現場で子どもの特性やその特性を前提にしたペアを構成することで、Small Talk の発話を改善し、教育効果を向上することに寄与する発展性も期待される。得られた知見をまとめて、これからの小学校外国語科「話すこと [やり取り]」領域の指導に活かせる新たな指導法を提案した実践的知見は、学校教育への具体的な提言となっている。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は山口美穂の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。